



日乗連ニュース

ALPA Japan NEWS

www.alpajapan.org

Date 2009.08.03

No. 33 - 01

発行: 日本乗員組合連絡会議・ALPA Japan

幹事会

〒144-0043

東京都大田区羽田5-11-4

フェニックスビル

TEL.03-5705-2770

FAX.03-5705-3274

E-mail:office30@alpajapan.org

世界は「疲労」に真剣に取り組んでいる！

International Conference on Fatigue Management 参加報告

3月(23)、24、25日に Boston, USA で行われた 2009 International Conference on Fatigue Management in Transportation Operations に参加してきました。この会議は題名の通り、あらゆる輸送産業における疲労問題を経営者側、労働者側を問わず、科学的、学術的にとらえた有意義なセミナーの集合体です。FAA、NTSBをはじめ各国の大学研究機関や疲労リスク管理コンサルタント会社、航空会社、組合など約200人前後の参加がありました。

スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション等、イベント数は約100にも及びましたが、その中で分野ごとに興味のあるものを選択して参加するという形がとられており、我々は主に航空の分野に関するセミナーに参加しました。

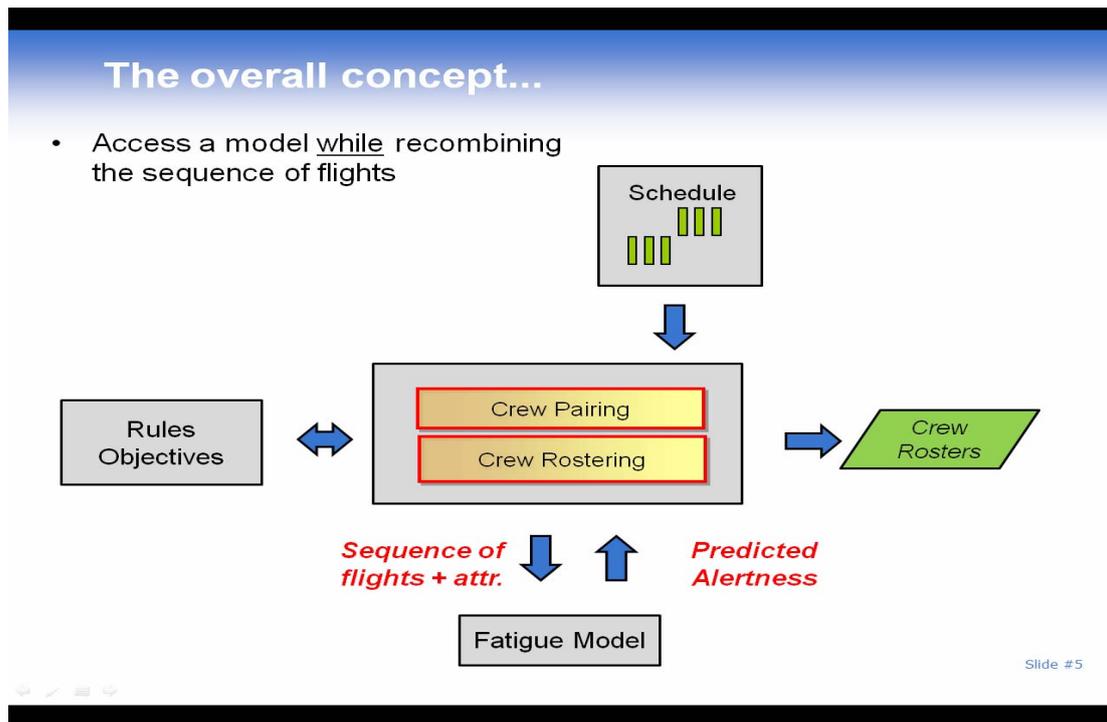
HUPER 委員会として参加したセミナーのほとんどで強調されていた Key Word は、Safety Management System (SMS : 安全管理システム) と Fatigue Risk Management System (FRMS : 疲労リスク管理システム) です。SMS はあらゆる産業において注目されるべき安全に対する管理体制で、今までは利益、効率向上の名の元に軽視されることがあった「安全管理」を経営者がしっかりとすることによって、労働者だけではなく、あらゆる Stakeholders に利益がもたらされるという考えです。そして SMS の重要な一要素として、FRMS (疲労リスク管理) が挙げられています。早い話が、「労働者が疲れていては安全、かつ品質の高い仕事ができない。⇒顧客にも危険、不利益が及ぶ可能性が生じ、結果、他社の商品、仕事の方を向かれてしまう。⇒利益が上がらないので投資家も興味を示さない。または手を引く。⇒経営者にとって不利益。『こんなことなら、最初からしっかりと安全(疲労)管理をしておくべきだった。』」という図式にならないようにする為のシステム研究です。

欧米の企業の間ではこの SMS の中に、FRMS を取り入れるという考えがすでに広まっています。経営者側が「安全に仕事をしてください。」と労働者側に具体性のない話をするのではなく、SYSTEMATIC に安全管理、疲労管理をすることによって、より安全な、品質の高い仕事ができるような環境を提供しているのです。

我々に関係が深い、実用的な話もありましたので紹介します。それは、乗務員のスケジュール管理を乗務時間制限という観点のみから考えるのではなく、疲労度も基準に含めるというものです。元々、乗務時間制限は我々の過労を無くすことから始まった考えです。



しかし、疲労要素を係数化し、具体的に計算をすることによって基準作りができれば、より疲労の少ない、安全な仕事ができるという考えです。事実、研究の進んでいる欧米では、数社の疲労評価モデルをベースにした乗務員（運航、客室）スケジュール評価（作成）システムが既に開発されています。乗務時間制限のみならず、サーカディアンリズム、Alertness（覚醒度）、時差、睡眠の質等の疲労要因を係数として計算し、かつ個人的なイベント(VAC等)も考慮するというものです。



疲労管理システムを取り入れたスケジュール評価（作成）ソフト開発を既に行っている会社の説明によると、最も疲労した状態、つまり覚醒度が極端に低くなるような勤務割の作成は避けることが可能で、高い疲労状態で緊張を強いられる離着陸の実施のタイミングをあえて外すことが、このシステムでは実現できると話していました。又、前記した疲労係数を考慮したスケジュール作成を行なってもマンニング的にはあまり変化がないことも説明していました。「疲労度（安全度）」をインプットしたスケジュール作成システムであることは評価できますが、「生産性」偏重になっていないか、仕事以外のライフスタイルとのバランスも含めて、本当に有意義なシステムなのかについては、今後検証していく必要があります。

シンポジウム最終日には、参加者（NTSB、FAA、航空会社、組合、研究者、）それぞれの立場がある中で、疲労管理に関してどのようにしていけばよいのかの積極的な議論を全体で行っていました。このような 国、航空会社、組合、研究者らの問題解決へ向けた姿勢も参考となりました。

日乗連は、引き続き、疲労管理をめぐる世界の情報収集を行っていきます。